

---

# C-collapse-

朝比奈誓

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

C-collapse -

### 【Nコード】

N5163V

### 【作者名】

朝比奈誓

### 【あらすじ】

「C」二次制作。11話の後の話です（見ていない方はネタバレ注意）。

主人公・余賀公麿は真朱を救い羽奈日とフォーリンラブする事を目指し、新たなアセットと共にアントレ達と戦っていく！

オリアセ&amp;アントレばしばし出てきます。キャラの壊れっぷりも凄いです。若干の流血なんかもあります。苦手な方はご注意ください。

r e v i v a l - 回想 - (前書き)

? 原作ほど設定しっかりしてません  
? 連載

“金融街”。

それは金の集まる場所に出現する不思議な世界。

「アントレプレナー」の未来を担保にして金ミダスマネーを貸す。

アントレが「アセット」を使い戦うバトル「デイル」を週1で行わなければならない。

勝てば天国 - 相手から奪ったミダスマネーが手に入り - 負ければ地獄 - “未来”を奪われる。

これは、>ダークネスカード<を手に入れ未来を救ったアントレ、余賀公麿のその後の物語。

「…ああ」

俺は余賀公麿。平成経済大学経済学部2年。

「生活費い…」

バイト2つ掛け持ちだが生活費が足りない。どんなこった。

「ヤベエ…」

深刻だ。

ちなみにこの世界に円は存在しない。日本の通貨はドルだ。原因は竹田崎の仕掛けたハイパーインフレだ。そっぴやあの人、今何してるんだろ。やっぱり金融街にいるのかな？後ジェニファーさんも三國さんも……………

…そんな事より生活費。

「ヤツベエ…」

すると突然、

「お呼びでしょうか？余賀様」

聞き覚えのある声が聞こえた。一度聞いたら忘れられない様な声が。

「真坂木」

極東金融街の真坂木だ。

「はい、余賀様。また金融街へいらっしやっただけませんか？」

「俺は行かない」

即答。

確かにミダスマネーは魅力的だ。生活に余裕が出来るかといわれると難しいが。

「俺は“未来”を守りたい」

これは心に決めていた。

「ですが余賀サマ？……」

真坂木が告げたのは衝撃の事実。

「…分かった。金融街に行くよ」

「ありがとうございますー」

真坂木はそう言って消えた。

そしてその後に残っていたのは…

「カード…か」

d e s t r u c t i o n - 過 去 -

〔井種田のハイヤー内〕

…金融街、どうなってるのだろうか。

そして真坂木の言った事を確かめなくては…

「しかしあなたも大変でしたねえ。金融街は不滅ですが」

「…ああ」

「着きましたよ」

〔極東金融街〕

「…変わってねえなあ…」

なんか色々。

「ええとー…」

「余賀様」

真坂木だ。という事は…

「これがあなたのアセットで御座います」

そこに居たのは真朱ではなかった。

「よろしく…お願い……します」

人の形で、薄い紫色のワンピースのような服を着ている。ただ手はデオキシスのようになってる。

俺のカードのティッカーシンボルはCUAN。という事は…

「趣杏」

俺の新アセット、趣杏。どうやら真朱とは正反対の性格らしい。

「お前、新人か？」

「いえ、前にもアントレがいました…」

へえー。どんなアントレだったのだろうか。

そんな事を考えていた時、声をかけられた。

「余賀」

振り返ると、そこにいたのは…

「サトウさん！」

IMF所属の謎多い女性。

ジエニファー？サトウがいた。

「久しぶりだな」

「そうですね！」

「それは新アセットか」

サトウさんは趣杏を物珍しく見ていた。ま、それもそつだ。

「はい。こいつ、俺の新しいアセット？趣杏です」

「私も新しいアセットなのだよ」

サトウさんは新アセットを見せてくれた。ナゼルと言っそつだ。

「初デイルは明日だ」

「俺もです」

「健闘を祈る」

a g e i n ・ 健 闘 ・ ( 前 書 き )

アニメ見て無いとキツイ、見てるとユルい…



〔極東金融街〕

> O P E N - D E A L <

今回の相手は北村誠。28歳サラリーマン。けっこう普通。

「覚悟しろよ！与賀公曆！」

気合い入ってんな。

「行くぜ、趣杏」

「…はい、です」

趣杏とは初のディール。

「ホレエ！行くぜ！」

さて、行くか。

「ダイレクト！」

「direct」

「ダイレクトオツ！」

「direct」

相手は100万円分ぐらいか。で、こっちは200万円。

「行けつかな…」

「大丈夫ですよ、公曆さん」

趣杏。ありがとうエ…

公曆でエエ…よ…

「ああ」

「ボ…つとすんなあ！」

北村が突っ込んで来た。当たった。しかも3連発。仕方ない。

「趣杏、マクロ！」

「macro」

「はいっ！」

そっぴや趣杏のマクロって…何だ？

「ビューティー？パレード！」

「beauty parade」

ビューティー、パレード…。

美しい攻撃だあ…

「ぐハッ！」

残り100秒。

live・勝利

趣杏のビューティパレード。

あちらも応戦する…か？

「いけ！マクロフレーション！」  
きた。

「趣杏！」

「はいっ！」

絶妙なタイミングでの趣杏のガード。

「どうですか？」

…スゲえ。

？デール終了？

なんとか僅差で俺の勝利。いや、これが狙いだけどさあ。

「勝った…！」

趣杏。

ビューティ・パレード。

あれは強い。Qにも匹敵するかもしれない。

「おやつにミダスマネーはやめろよ」

「…??？」

「あ、いや、別に」

「そうですか」

「…ラーメン、喰うか？」

趣杏のビューティーパレードで勝利したあのディールから一週間で経った。今日もまた、ディールである。

「頑張ろうな、趣杏」

「はい」

そうそう。趣杏はチョコレートが好きらしい。なんか本当に女の子っぽいな、と感じる。

話を戻す。今日のディールの相手は工藤という人だ。この人はなぜか僕にディールを申し込んで来た。前の様にダークネスを持っている訳でもない今の俺と戦う人なんていたのか…。

「真朱」

工藤は私を呼んだ。

「はい」

なんか工藤には慣れてないからつい丁寧なカンジになっちゃう。キミマロの時は無かったのに…。

「今日もディールだけど…」

工藤は連日かなりディールをしている。初戦から一週間しか立って無いのに私は8回出されてるもん。

「またディール？」

正直大変だнатて。

「ああ。今日は君にとって大切なディールになると思うよ」

え？言葉の意味が良く分からない。私にとって大切な…ディール？

「どーゆー事？」

「来れば分かるさ」

「対戦相手はどんなアセットな訳？」

だってそれわかんないと結構困るんだよ。  
でも工藤は「お楽しみ」としか言ってくれなかった。

そして、俺と趣杏はディールの場所に来た。そして見た。このディール  
の相手、工藤は――

**d i s t i n y - 準備 - (後書き)**

相手は真朱ですww

多分すぐ次を投稿します。

d e a i l - 対峙 -

工藤は――

「まじかよ……」

「初めて…見ました。本当に…あった……」

それは金融街最強のカード。

そう、ダークネスカード。

彼はそれを持っていた。

「…頑張ろう。本気で行く」

「もちろんです」

俺は、彼とのディールに挑む！

「やっぱり今日は休んでいいよ、真朱」

工藤はディール直前にそんな事を言った。

「…わかった。けど、どうして？」

「答えはじき分かるさ。今はまだ知るには早い」

工藤の答えは曖昧…。

「とりあえず今日はインサーで行く。だから見ている」

そうして工藤はすぐにディールに進んだ。そして、私は見てしまった。

キミマロを。

[ o p e n n - d e a i l ]

俺は趣杏を出す。

そして工藤は“インサー”を出した。こいつは実戦担当らしい。

「実力を見せてもらおうか」

工藤は俺を向いてそう言った。

…行くしか、無い。

「ダイレクト!!」

「direct」

100\$のダイレクト。

「趣杏!」

俺はカードをスラッシュした。

「はい!」

安いメゾを4発連続で。これで工藤はどう来るか…



i n v e s t o r - 抹 消 -

「ほお。反応がそんなに知りたいか」

工藤は言い放つ。やっぱり分かっていたのか。

「…ああ、そつだよー!」

俺は工藤に向かって走った。

「うらああああ!」

「…フン」

趣香のメゾはインサーによってガードされた。しかし俺は怯まないで走る。

そして、工藤の左脇腹を刺した。

「…くっ」

刺した場所が黒く染まって行く。

俺はダイレクトを連続で刺す。

工藤もダイレクトで応戦。

1000\$の長い剣。

まるで…

「…三國、壮一郎……みたいだな……」

すると工藤は…

「やっぱりあんた…元ダークネスの……」

後方では趣香とインサーが戦っている。

「だから何だつて言うんだよ!」

「…さあ?」

…何なんだよ、こいつ。

「あんたは金に興味ねえのか?」

楽しそうに聞く工藤。

「無い訳は無いだろうがよ」

俺の左腕が黒く染まる。

工藤の右手も黒く染まる。

「そうかい」

すると、工藤はカードを出した。

「与賀公麿。消えろ！」

「貴様のように金に興味の無い奴がここにいる理由があるのか!?」  
確かに俺は金に興味は無い。しかしここにいる理由は有る。輪転機  
の逆回転。

「…あるに決まってるだろうが!」

「じゃあ何なんだ!」

工藤が俺の右肩を刺す。

「未来を守るためだろうがア!」

すると工藤の口元が歪んだ。

「はあ? 未来?」

俺は工藤の腕と顔を刺す。工藤も左膝を刺す。痛みが伝わってくる。

「そんな訳のわからない物を頼つこれ(ディール)をするのか? 馬鹿  
鹿げているだろうが。未来? 知るか、そんなもん。あんたみたいに  
生ぬるい気持ちでこんな事<sup>ディール</sup>はできねえんだよ!」

「生ぬるくはねえだろうが! あんた、C来たらどうすんだよ!」

「C? ああ、あのシンガポールとか言う国が消えた原因だったと言  
うやつか?」

「そつだよ」

「んな事に興味ねえ!」

「どうよどうよどうよ!?! いいつしょ?」

「まあ、確かに」

「やつちやわない?」

私は少し悩んだ。目の前にいる女性―宮川凜の所属する三國ギルドに入るかどうかについてだ。入れば毎月一定額を払う事にはなっ  
てしまうが、ディールのリスクはほぼ回避される。

「…わかりました。入ります！」

私は所属の承諾した事の書類などを記入？サインをした。

「これで大丈夫。ディールでヤバくなったらうちの柊総統とかが株買ってくれるから。て訳でよろしく羽奈曰ちゃん！！」

「はい、よろしくお願いします」

「生田羽奈日…っ」と

私はギルド会員しリストにたった今入会した女性の名前を書いた。

「つかー、このギルド作ってどうすんのかなよ柊総統うー？」

私は目の前にいる男に尋ねた。

彼ー柊は三國ギルドの総統だ。

『三國』という名前は、伝説のアントレ・三國壮一郎の名から来ている。そのアントレはうちの総統と同じくダークネスだったんだとか。すごいよなあー。

「おいおい、大丈夫か？凜。目指すのはひとつしかないだろう。あんたも幹部なんだからしっかりしろ」

幹部…ねえ。聞こえだけは無駄にいい言葉。

「で、そのためなら最悪相手を破産させてもいい、と。それでよく三國の名前語ってられるよね」

三國は今を守るためにバランススタイルとやらをしていたらしいからな。

「三國とは目指すことは同じであろうっ？」  
やり方は違ってても、ですか。

world - 未知 - (前書き)

久々にcollapse更新つ!!

「興味ねえとか…あんだ……」  
俺はカードをスラッシュする。

「なんつーか…」  
メゾ。

「なんだ余賀公磨？」

「うらああああっ!!」

趣杏が工藤にメゾを打ち込む。

インサーがそれをガード。

「…おかしいのかよ………」

「はア…？」

工藤は笑う。

「こんなメゾで俺に勝てると思ったか?…いい事を教えてやるう。

俺とディールした相手はな…絶対破産すんだよ!!」

工藤は大きなダイレクトを俺に向かって撃とうとする。当たったら

破産するよな、コレ。

「公磨さんっ!!破産しちゃいますよ!？」

だが…このまま…

横を見る。

この時間なら…!

一撃がくる。

俺はギリギリでかわす。

そして……

「終了でございます」

「…スゲエな、あいつ!」

「工藤さんとやって破産してない!」

「初めてか？」

工藤とのディールが、やっと終わった…

「公曆さんっ！！凄いですっ！！」

「趣杏…！やったな！！」

「運が良かったな、余賀公曆」

工藤か…

「次はこうはいかない…」

「…だろうよ」

「あっ、工藤！」

誰かと思ったら、宮川凜か…

「どだったどうだった？」

そとにいる柊は…黙ってんのか？

「勝ったよ…でも」

「おっ？なに？」

「破産させてないんだよ」

「ちょ…柊！ここで口挟むなよ！！」

「えっ…マジ？」

「…ああ」

「…君に破産させられないアントレがまだいるなんてね…わからないものだな、ディールの結果というものは」



「奇遇だな、余賀」

誰かと思つたらサトウさんか。

「あつ、久しぶりですねサトウさん」

ジエニフアー？サトウ。

IMFに所属。

前の世界では俺の前に三國さんと戦い、破産した人物。まあ、今の世界では現役のアントレだが。

「聞いたよ。工藤とディールしたんだってね」

「ええ。でもなんとかまだここにいますよ」

「君はやはり凄いな」

「…そんな事、ないですよ」

「そうそう、最近低年齢のアントレが出てきたんだってな」

「へえ…でも小さな頃からアントレはつらいんじゃないか……」

「くーどーうさーん？」

宮川の呑気な声。でもディールの時は結構ガンガン攻めてくるんだよな、こいつ。

「何だよ、つたく」

「あつ、ご機嫌ナナメ？ゴメンゴメン。…でもそんなに悔しいんだあ。余賀とかいう人とのディール。趣杏使ってさ。案外あれもあそこまで使えるとは思ってなかったよ」

「…ああ」

俺のやり方が通じなかった。

破産させられなかった。

ただ単純に悔しい。

「でもなあ、私的に複雑だな。あ、そうそう」

宮川がガサゴソとファイルの山を探る。

「コレ見てくださいよっ！！また勧誘ですたんです！今回は女性が  
多めです」

珍しいな、女性が多めなんて。

「あ、あと……」

「どした？」

「この人とこの人も入ったんですよ……」

「うん？」

彼女が指さす先にあった名前

「生田羽奈日……この前のデイルした奴のガールフレンドか。でこ  
っちは宇野柳？えと……」

「最近話題の低年齢アントレってやつですよ。12才、まだ小学生  
ですって」

t a l k - 談笑 - (前書き)

過去編的なのを作りたいけど何故かこうしかできなかつた……

「趣杏ッ!!」

凜は自身のアセットー趣杏を殴る。

「なんであんたはそんなにクズな訳!？」

「や…やめてください……」

「ああん?アセットの癖に生意気だな」

今度は思いきり蹴りつける。

「あんたがザコだから!貧弱だから!!バカだから負けるのよ!?  
解つてんの!？」

「わ…私が悪いんです……ごめんなさい」

「はあ?もつときちんと謝りなさいよ!!」

「ごめんなさい!本当にすいません!!」

彼女のアセットは大声で謝る。

「ハア……あんたみたいなくズ、もういいわ。……私ね、ギルドに入る事にしたのよ。で、そこで知り合った人に新しいアセット貰ったのよ。だからあんたはお役御免。バイバイ」

見捨てられたアセットは、ずっと静かに泣いていた……

「趣杏は……その後?」

「真坂木さんが来て、まあ……ポスト的なところに連れられました。そこで一ヶ月くらいして……あなたが」

「…大変だったんだな……」

「でも公磨さんだって大変だったんじゃないんですか?輪転機を回したって聞いた事ありますし。というかあれって本当なんですか?」

「…本当だ。俺は三國とデイルして……その後アレを回した。そしたら世界は少しだけ変わってたよ。俺が好きだった人は夢叶えてた。本当嬉しかった」

「公磨さんって彼女いたの!？」

「片想いだった。でも……」

「何なにつ!？」

「彼氏持ちだった……」

t a l k - 談笑 - (後書き)

次回、大きくストーリーが進む!はず!!

C-collapse - 番外編 これはデートですか？ 前編（前書き）

アメリカで続けるの無理そうなんで移しました

とにかく暑い、夏のある日。

公曆はoh!martの制服に身を包む。

「よろしくお願いしやーす」

こう暑いと家から出る気力もなくなるが、全ては生活費の為…

「余賀……ここんとこずいぶん頑張ってたけどどうした？」

「あ……この前派手に金使っちゃまったんで」

それは、一週間前にさかのぼる……

「もしもし……って……えと……はは羽奈日さんっ!?!」

公曆の自宅。

ケータイの向こうに聞こえるのは、公曆が以前の世界で密かに思いを寄せていた女性、生田羽奈日の声だった。前の世界でアントレでなかった羽奈日は高校の時の事などは覚えていないが、今は羽奈日もアントレであり、公曆は金融街で羽奈日の電話番号をゲットした。『もしもし公曆さん？あの…四日後、お食事に行きませんか？二人きりで』

「食事っ!?!ま……本当ですか!?!」

『ええ』

女性と食事。しかも相手は羽奈日。

そして二人つきり!!

「行きます行きます行きます!!」

……そうして、公曆は羽奈日と食事の約束をしたのだった……



**p u n i s h m e n t - 処罰 - (前書き)**

珍しくタイトルが同じ意味です。

あとSchool Food Punishment好きです。関  
係ないです。

そして今回は小学生アントレが主人公です。

「フリーズアウト発動。さあて、これからどうしようかな？」

：今、この酒巻って奴とディール中なんだけど…なんつーか、攻撃雑だわ。あの情報屋さんの言う通りだね。メゾ一発で調子に乗りやがって。

とりま、こちらメゾを使うか。

「ヴァーン、メゾ使うよ！」

カードをスラッシュする。ヴァーンの固有フレイションは>クラウド・ジュエル<。すっごいキラキラした礫を飛ばす技。

「構わず行け、グルー！」

やっぱり雑だね、アイツ。

「いつけー！！」

ヴァーンは？クラウドジュエル宝石の礫をグルーめがけて飛ばす。

グルーは氷の壁を造りガードするけど、礫はその壁を貫通する。

私はそれとほぼ同時にカードをスラッシュ。ヴァーンにチャージし、光の剣・ダイレクトを出す。そして酒巻の元へと走る。

「うらあああああつ！」

グルーがガードに入りガードするが、私はグルーごとぶった切った。酒巻の体に赤黒い液体が流れ出す。

「この野郎…チヨロチヨロ動きやがって…！」

刹那、酒巻がかなりデカイダイレクトを出し、私に向けて振る。

「ヴァーンッ！」

私は叫ぶ。と同時に私の体から液体が流れたチヨコレット。痛い。

「ヴァーンッ！」

メゾをヴァーンが出す。だがグルーにガードされる。

「案外弱いじゃねーか！」

そして酒巻が私にダイレクトを降り下ろした。

**p u n i s h m e n t - 処罰 - (後書き)**

次回も柳サイドです。

s e n t e n c e - 判 決 - ( 前 書 き )

c o l l a p s e ア ン ソ ロ ジ ー 計 画 中。

天 然 中 終 わ っ た ら や り ま せ う か。

メゾを出し、防がれる。

資産は減り続ける。

いつそマクロフレージョンでも豪快に出してやるつかと思うけどそれはそれで面倒だし。

なんか私って、やっぱり弱いのかな…

脳裏に破産の二文字が浮かぶ。

…だが。

不意に、周囲がざわめいた。

「柳ちゃん!」

聞き覚えのある明るい声。え………つと……あ、ギルドの人か!

「宮川さんでしたっけ」

「うん! ってそれはいいけど。とりま柳ちゃん、株公開して!」

「あっ…はい! 株…公開ッ」

ヴァーンの株が公開される。アセットの株は9株まで売っても問題無い。

「一千万で買い!」

宮川さんの声が響く。

「これでメゾ行っちゃえ!」

「はい!」

カードをスラッシュし、ヴァーンにチャージ。

「何株の話なんてしてんだ!」

酒巻がダイレクトを持って突っ込んでくる。

「別にいいでしょ! あんたと関係ないっ!」

咄嗟に交わし、酒巻の脇腹にダイレクトを突き刺す。

「ぐふっ!」

酒巻が雑にダイレクトを振り回す。二発当たった。痛みで体の感覚が麻痺してくる。キツイ。

そこにグルーがメゾ出しながら突撃してくる。ヴァーンはその背後に周りこみ、こちらもメゾ。

「もう一発！」

私と酒巻がハモる。残り時間的にもこれが限界。

…そして。

勝ったのは……

私、宇野柳だった。

結構危ない時もあったけれど、なんとか勝てたって感じ。

「良かったね、柳ちゃん！」

宮川さんが駆け寄ってくる。

「ありがとうございます」

「いやいや。ディールしたのは柳ちゃんだよ？」

「でも株買っていたいただきましたし」

「でもこっちにも配当あったしさ」

本当、宮川さんってプラス思考だよな…

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5163v/>

---

C-collapse-

2011年11月22日23時53分発行